

『ジェンダーで読み解く男性の働き方・暮らし方 ワーク・ライフ・バランスと持続可能な社会の発展のために』

— 第20回「ぶっく・とーく」より

本誌で紹介した書籍の著者を招き、お話を伺う「ぶっく・とーく」。2023年2月23日（木・祝）開催の第20回「ぶっく・とーく」では『ジェンダーで読み解く男性の働き方・暮らし方ワーク・ライフ・バランスと持続可能な社会の発展のために』（時事通信社、2022）を取り上げ、著者の関西大学教授 多賀太さんにお話いただきました。聞き手は、聖心女子大学教授 大槻奈巳さんにお話をしました。本誌では当日の内容を紹介します。

大槻: 今回の「ぶっく・とーく」は20回目ということですが、20回目にして初めて男性をテーマにした著書を取り上げるということで、興味深い回になるのではないかと思います。本日の講師である多賀太さんは、男性とジェンダーについて一貫して研究されている男性学のパイオニア的存在です。今回、取り上げる本の表紙には「なかなか進まない男性の家事・育児参加。男性稼ぎ手社会を壊すことは男性の生きづらさも解消する」とあり、はしがきでは「今なぜ男性に変化が求められているのでしょうか。それが必要だとして、男性たちはどう変わればよいのでしょうか。そしてどうすれば変われるのでしょうか」と問題提起されています。この問いの答えが書かれているご著書について、まずは多賀さんよりご紹介いただきます。

多賀太さんより著書のご紹介

■執筆のきっかけは「今日はお休みですか」

平日の昼間に男性の私が地域にいるとかけられる言葉です。声をかける人はお天気の話をするくらいの感覚だと思います。けれども、男性は平日の昼間にいなくて当たり前、女性はいて当たり前というアンコンシャス・バイアスが背景にあり、積極的に子育てをしたい男性や外で働きたい女性の足かせになっています。ところが、コロナ禍になり在宅ワークをしていると、「お宅もテレワークです

か」と声をかけられるようになりました。もしかしたら、地域に男性がいることが当たり前になるかもしれない、そんなことを新聞のコラムに書いたら、編集者から「本にしてみないか」と声がかかりました。

人口の半分は男性。男性が参画しなければジェンダー平等は実現しません。ジェンダー問題の重要性を広く男性に気づいてもらいたい。でも、ジェンダー問題は女性の問題だという認識が男性にはありがちです。そうではなく、男性にとっても重要だと本書を通じて伝えたかったのです。

■男性の「ケア」の側面を強調

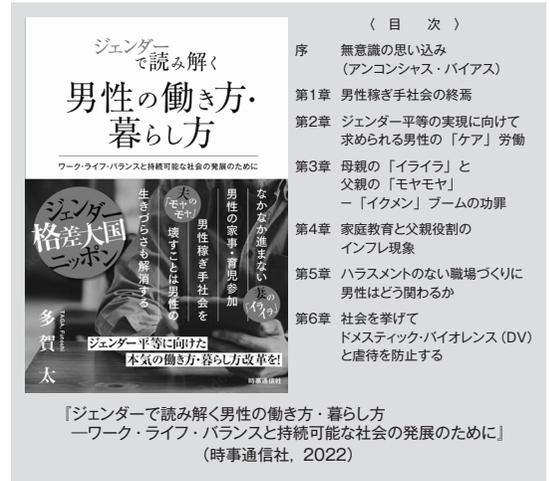
男性はタイトルに「ジェンダー」とあるだけで手に取らない傾向があるので、当初、この本には「ジェンダー」という言葉を使わないでいこうと進めていました。それが変わったのが、5章でも触れた“森発言”です。「ジェンダー平等」が一気に使われるようになり方向転換をしました。

海外の研究者と交流してわかったのですが、「ジェンダー」という言葉について、海外でも同じ課題を抱えていました。「男を問い直す」「ジェンダー平等にコミットする」などの表現では、なかなか男性の関心が集まらない。一方で、「父親」としての側面を強調すると、とても反応が良いと言うのです。ですから、父親の問題を強調しながら、男性とケアの関係を焦点を当てました。



講師 たがふとし
多賀太さん
(関西大学教授、当財団評議員)

専門は、教育社会学、ジェンダー学、男性学。日本や東アジアの男性に関する研究の他「男性の非暴力啓発運動」にも力を入れる。(一社)ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン代表理事など。



〈目次〉

- 序 無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス)
- 第1章 男性稼ぎ手社会の終焉
- 第2章 ジェンダー平等の実現に向けて求められる男性の「ケア」労働
- 第3章 母親の「イライラ」と父親の「モヤモヤ」 - 「イクメン」ブームの功罪
- 第4章 家庭教育と父親役割のインフレ現象
- 第5章 ハラスメントのない職場づくりに男性はどう関わるか
- 第6章 社会を挙げてドメスティックバイオレンス (DV) と虐待を防止する

「ジェンダーで読み解く男性の働き方・暮らし方
—ワーク・ライフ・バランスと持続可能な社会の発展のために」
(時事通信社, 2022)

■男性が「ケア」に参画する必要性

1章「男性稼ぎ手社会の終焉」で触れたように、男性自殺者数は女性の2倍、50代の生活習慣病も多く、稼ぎ手としての責任や職業的成功への負担などが原因とみられています。2章で「ジェンダー平等の実現に向けて求められる男性の『ケア』労働」について書きましたが、家事・育児・介護の家庭内ケア労働は生きていく上で不可欠の労働であるにもかかわらず、現状では女性に偏り過ぎています。

また、ケアにかかわる職業には、男性はあまり参画していません。ほかにも、男性は気づかみや身のまわりの世話などのケアを女性から受けられているおかげで、仕事に集中できているという側面があります。男性たちも他人のニーズに応えられるようケアをする側に回ることや、自分自身を大切にすることも重要だと思います。

3章、4章では父親について書きました。3章「母親の『イライラ』と父親の『モヤモヤ』 - 『イクメン』ブームの功罪」の中で「取るだけ育休」ではなく、「実のある育休」とを提唱しています。男性が育児をすると、リアルな悩みが生まれてきます。「子どもがなつかない」、「家事・育児の仕方で妻と衝突する」などは、「家庭内ジェンダー平等」への過渡期だからこそ起きやすいことかもしれません。

■女性の生きづらさ解消には男性の変化が必要

男性が女性の生きづらさを生じさせている側面

があるのは事実で、その解消には男性の変化が必要です。しかし、男性は、ジェンダー平等と聞くだけで、責められている、利益を失う、と思いがちです。だから、頭ごなしに責めずに、ジェンダー不平等社会は男性にとっても生きづらい、そして男性のアクションがジェンダー平等につながると強調しました。自分を見つめることは苦手でも天下国家を語ることに関心が高い男性もいるので、このままだと地域、職場、社会がもたないですとも呼びかけました。

さらに、5章、6章で取り上げたセクハラやDV、性暴力などの話になると、単なるジェンダー平等の話以上に拒否反応を示す男性が多いです。実はかつてこの感覚は私にもありました。でも、それは男性の非暴力運動「ホワイトリボンキャンペーン」の創始者との出会いで変わりました。「暴力をふるったことがないのに、“男性”というだけで、加害者のように責められていると感じる」と伝えたところ、「暴力をふるう男性の代わりに罪悪感を覚える必要はない。しかし、女性に対する暴力をなくすために何もしていないのなら問い直してほしい」と言われたのです。

セクハラやDV、性暴力などは、女性の被害者が多いという意味では女性問題であると同時に、男性が加害を起こしている点で男性問題でもあるのです。男性による加害を減らすためには、男性自身も暴力によって、自身の人権が侵害されていない



聞き手 おおつき なみ
大槻 奈巳 さん
(聖心女子大学教授、当財団理事)

専門は社会学、労働とジェンダー、キャリア形成。近年の研究テーマは、若年層の管理職志向とその変化、育児休業や短時間勤務と人事評価雇用管理区分と転勤の必要性など。



オンラインと会場をつなぎ、ハイブリッドで開催

か敏感になることが重要です。また、被害者を守り支えることは、なにも暴力の場に割って入ることだけではありません。被害者を責めるような言動をしない、させないということも必要です。誰もが無関係ではないし、できることがあるということも本書で伝えたかったことです。

聞き手 大槻奈巳さんとのトーク

大槻:「傍観者でいることは加担していること」というお話は、ジェンダー平等にも置きかえられますね。「何もしてないことがあるなら、何かすることから始めよう」という言葉があります。

本の話に戻りますが、驚いたことがあります。「ケア」をしている男性ほど、職場での差別意識や競争意識が強い、また妻への要求のレベルが高いという調査結果です。どのように考えていますか。

多賀:今や家事・育児も男性が「すべき」ことのひとつになっていて、競争意識の強い男性は仕事だけでなく家事・育児でも競い合っているのではないのでしょうか。ほかには、家事・育児を不本意にやらされ、その反動で女性につらく当たってバランスを取っていることも考えられます。その後の分析で、3パターンの男性がいることがわかりました。「伝統的な価値をもち、家事・育児をあまりしない人」「ジェンダー平等な価値をもち、家事・育

児をよくしていて、精神状態がよい人」「伝統的な価値をもっているのに、家事・育児をすごくしていて、精神状態が非常に悪い人」です。この最後のタイプの男性の研究を深め、サポートしていきたいとも考えています。

大槻:最初に多賀さんが発言されていましたが、ジェンダーにかかわるテーマだと男性の参加者を集めるには苦勞しますね。今日も男性の参加者は、とても少ないです。男性を集めるためのアイデアはありますか。

多賀:日本女性学習財団のイベントで言うのも申し訳ないのですが、「女性」と付くだけで男性がなくなることはよくあります。

ジェンダー平等を男性が自分ごとにするためのアイデアが3つあります。1つ目はこのままだとうまくいかなくなるのではという「おどし」、2つ目はこんないいことがあるよとジェンダー平等の「メリット」をみせていくことでしょうか。3つ目は「励まし」、あなたが動けば社会が変わりますよ！と、管理職や政治家など「力」をもっている層のヒーロー志向をくすぐるのはいかがでしょうか。

大槻:多賀さんご自身のことについてお聞きします。男性学に取り組むきっかけ、長く続けられている理由はなんでしょうか。

多賀: 卒業論文で母親が働いている家庭の子どもの性別役割分業意識を取り上げました。そのため当時、女性学、フェミニズムの論文を読みました。女性の研究者が書かれたものを読んでいると、男性が責められている気がしてしまい、このままジェンダーを研究するのか、テーマを変えるか悩んでいたとき、「男性学」に出会いました。当事者としてならば、ジェンダー研究に一生かかわれると思いました。

こんなに長く続けられたのは、自分のライフステージごとに、さまざまな男性問題に着目しながら関心を広げてきたからだと思います。最初は若い男性が古いジェンダー観と新しいジェンダー観が交錯する社会で、どうアイデンティティを形成するか、まさに自分にとっての深刻な問題でした。次は学校現場でのジェンダー平等、教員として「男子」に何ができるかを考えました。父親になってからは、ワーク・ライフ・バランスなど労働問題をからめて深められるようになりました。

そして、研究のほかに市民活動にもかかわっています。問題が起きている現場に居続け、さまざまな状況に置かれた人々と接しながら、ジェンダー問題を常に自分に身近な問題として感じています。1990年代の若い頃に参加していた「メンズリブ」の場で、立場の違いを越えて仲間と本音で話せた経験も大きいです。

会場からの質問

Q: 学童保育の指導員をしています。ジェンダーに関して現場で気をつけることはありますか。

多賀: まず、環境について、合理的な理由がないのに、男女で分けていないかチェックが必要です。たとえば名簿や持ち物などです。次に子どもたちと指導する側の関係性ですね。「あるべき」や「役割」を性別で決めつけていないか。あとは、子どもたちの中でジェンダーステレオタイプの押しつけがあったら、適切に介入していくことも大切です。

Q: ご自身のお子さんを育てるときにジェンダーの視点から大事にされたことはありますか。

多賀: やはり、ステレオタイプに縛られないようにと気をつけました。妻と私が身近な役割モデルであることも意識しました。性教育に関しては親が言うのが嫌がると思ったので、発達段階に応じた本などをそっと与えたりしました。もちろん、質問が来たときには率直に答えました。

最後に

大槻: 多賀さんが、女性の研究者が書いたジェンダーの論文を読まれて責められていると感じたことがあるとは…複雑な思いがしました(笑)。

多賀: 男はつらいよと安心して言える場と、男として利益を得ていたり気づかないうちに差別に加担してしまったりする側面に対する客観的な指摘、どちらも必要だと思っています。男性たちには本書をすべて読まなくてもいいので、関心のあるところからでも、ぜひ読んでほしいです。今後も男性たちが自分ごととしてジェンダー平等にコミットしていけるよう寄与できればと思っています。

参加者からの声

- 「ケア」について、相手の意図を汲み取り対応するという視点は、「家事・育児を手伝ってあげる」から男性が卒業するために必要だと感じました。
- 多賀さんが男性問題一筋に研究・活動をしてきた理由、男性性について考え続けるためにライフステージごとに関心事をアップデートさせたというお話は納得でき、示唆に富むものでした。
- ジェンダー問題は女性と男性の対立構造になりがちですが、互いの生きづらさを受容しながら対話できる安全安心の場をつくっていきたいと考えました。
- 傍観は加担と同じというお話は、男性だけでなく女性にも当てはまると感じました。傍観者のままでは何も変わりません。私もできることから始めてみます。

(まとめ:編集部)